

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ノイバラ *Rosa multiflora* Thunb. var. *multiflora*
 (= *Rosa polyantha* Siebold et Zucc.)
 (バラ科 Rosaceae)

連絡先：城西大学薬学部生薬学教室
 shiratak@josai.ac.jp

暑かった夏が過ぎ、秋風の吹く頃、野山を歩いていると、ほんのり赤味がかかった小さな実をつけた棘の多いつる性の低木を見かけます。特に河原や原野などでこんもりした茂みをつくり、触れると鋭いとげが皮膚や衣服を刺します。ノイバラ（野茨、野薔薇）は北海道から本州、四国、九州までの川岸の茂み、原野、林縁などに生え、朝鮮半島や中国にも分布する落葉低木で、5～6月頃、枝先に5枚の白い花弁をもった直径約2 cmの可憐な花を円錐状に多数つけ、周りにほのかな香りを漂わせます。雄しべは黄色で多数あり、雌しべは無毛。花柱はゆるやかに合着して柱状に



写真1 ノイバラ (花、遠景)



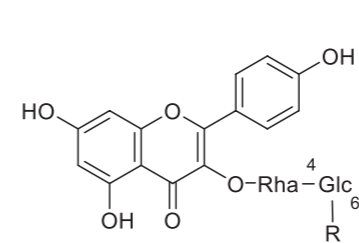
写真2 ノイバラ (花)



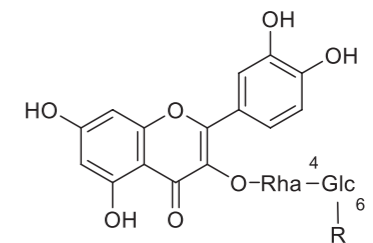
写真3 ノイバラ (果実)



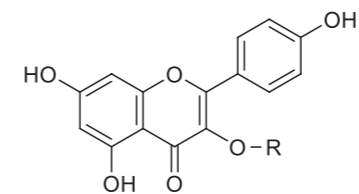
写真4 テリハノイバラ (花)



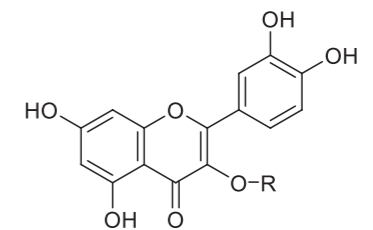
multiflorin A R
 multiflorin B COCH₃
 H



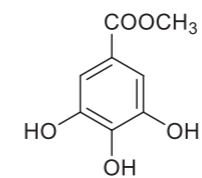
multinoside A R
 multinoside B H
 Glc



kaempferol R
 afzelin H
 Rha

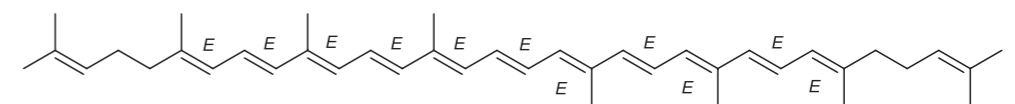


quercetin R
 quercitrin H
 Rha



methyl gallate

Glc = D-glucose
 Rha = L-rhamnose



lycopene

Double bond geometry as shown.

図1 成分の構造式

なり、花ののどの部分からつきでていて、^{がく}萼筒は壺状で、萼片は広披針形。萼、小花柄、花序の軸には軟毛と腺毛が生えています。種小名の *multiflora* はラテン語で「花が多い」を意味しています。万葉集には、「^{うまら}荊」という植物が登場しますが、これはノイバラだといわれています。バラという和名は、この「ウマラ」が「マラ」になり、さらに訛って「バラ」になったそうです。秋、果実のように見える^{うまら}偽果は直径6～9mmの卵球形で9～11月に赤く熟します。中には長さ3～4mmの^{けんか}堅果が5～12個入っていて、完熟した果実は甘くて香りがよく、果実（偽果）はエイジツ（^{うまら}営実、Rosae Fructus、偽果は玉営実、堅果は営実仁ともいわれます）といい、瀉下、利尿薬として家庭薬に用いられます。（現在、漢方薬としては、ほとんど用いられていません）。また、エイジツエキスは、おでき、にきび、腫れ物に効果があるとして化粧品成分として利用されます。薬用には、偽果が深紅色に熟する少し前、多少青味があったものがある頃に採取し、日干しにするのが良いそうです。本草綱目を書いた李時珍によると、8月に採取するのを良しとしています。成分にはフラボノール（フラボノイドの一種）の kaempferol 配糖体である multiflorin A, B, afzelin, quercetin 配糖体の multinoside A, B, quercitrin、タンニンの分解産物と思われる methyl gallate、果皮の赤色色素としてカロテノイドの lycopene などが報告され、multiflorin A には ED₅₀:30mg/kg という強い瀉下活性が認められています。

同属植物のテリハノイバラ *Rosa luciae* (= *R. wichuraiana*) は葉の表面にクチクラ層が発達しているため艶があり、花はノイバラより一回り大きく、花の数はノイバラほど多くありません。



写真5 生薬：エイジツ（^{うまら}営実），左：偽果，右：堅果